

直売所向け花きの栽培技術

ホオズキの栽培

ホオズキは赤いちょうちんのような姿が特徴的で、お盆の仏花としてなくてはならない切花のひとつです。一般的には、地下茎を親株にして露地で栽培されます。土壌は特に選びませんが、排水の悪いところや連作を嫌います。



品種

切花として栽培される品種は、「丹波ほおずき」「名古屋大実ほおずき」

作型

タネまきから始める場合は、5月から6月または9月から10月がまきどきで、収穫は翌年になります。

定植苗（地下茎）を11月～12月に植え付け、翌年の8月上旬に収穫する作型が一般的です。

育て方

定植苗

霜が降りて地上部が枯れてきたら地下茎（根株）を掘り起こし、水洗いをし

た後殺菌剤に浸漬します。病気のない充実した親株の新芽の発生を確認しながら、20～30 cmの長さに切断し、定植苗とします。

親株は、8月中旬にタネまきし、9月に植え付け、地下茎を育てておきます。

植え付け

植え付けは、11月から12月に行います。幅80 cmの畝に条間30 cm 2条植えとし、深さ5 cm程度の植え溝を2条作って、根株を1列ずつ並べて土をかぶせ、黒マルチを被覆します。

春の萌芽後、マルチを破り芽を地上にのぞかせます。

ネット張り

ホオズキは倒伏しやすいので、支柱とフラワーネットは必ず設置します。春先、萌芽してきたら植え付け間隔に合わせた目合いのネットを2段張り、生育に応じて草丈30～40 cmと60～70 cmのところに引き上げます。

芽の整理

不定芽が発生するので、草丈15～20 cmになった頃、株間12～15 cm間隔になるよう間引き、また地際部から分枝する株は勢いの弱いものを切り取って1本仕立てにします。切花目標は1 a 当たり1,000本です。

下葉かきと摘心

梅雨時期になると、下葉5~6枚をかき取り、6月下旬頃に1茎10果くらい着果した茎の先端を摘心します。

下位節が着果不良の場合は摘心せずに上位節での着果を確保します。

かん水

梅雨明け後に乾燥が続くときは、畝間かん水を行います。結実期の過乾燥は、落果の原因となるので注意してください。

着色促進

適期に着色させるため、基本的には、1回目は出荷日の3週間前、2回目は2週間前にホウズキの実にエスレル10の1,000倍液を1a当たり15リットル噴霧します。生長点の葉に液がかかると上位の葉も落葉するので、散布の際は必ず散布口を株元から上に向けて散布します。

収穫

果実の7割以上が着色したら地際部から収穫します。

上葉5枚程度を残して下葉を取り、水揚げして長さ、太さ、苞の大きさなどで選別して結束します。

ちなみに下から8割がオレンジ、上の2割はグリーンというのが、最も美

しい黄金バランスといわれています。

実だけを出荷する場合は、容器に6~8玉程度入れて出荷します。

病虫害防除

テントウムシダマシ、カメムシ類(ホオズキカメムシ)、アブラムシ類、ハダニ類に注意してください。

カメムシのことを「ホオ」と呼び、ホオが好きなものだから、「ホオ好き」⇒ホオズキと呼ばれるようになったという説もあるくらいですので、カメムシには特に注意してください。

施肥管理

植え付けの1週間前までに1a当たり5~6Kgの苦土石灰と200~400Kgの完熟たい肥をすき込んでおきます。

茎や葉の伸長(栄養生長)と開花結実(生殖生長)が並行して進むので、基肥には緩効性の肥料(IB化成など)を施用します。

3月下旬と6月上旬頃、生育に応じ300~500倍の液肥を追肥として与えます。

1a当たりの施肥例 (単位: Kg)

肥料名	総量	基肥	追肥	成分量
IB化成	20	20		2-2-2
トミー液肥	5		5	

